

もちてその形をかく、神いかりて帝約をぞむけり、はやくさりねと、始皇馬をはやめてかへる、馬の去りあしをひくに去たがひてはしつくる、にはかにきしにのぼることを得たり、晝がきつるもの、水におぼれてうみに去ぬと云々、されば神のわたす石橋は、いづこにもわたしえぬ事とおもひあはするが似たれば、かきのするなり、

私考云、秦始皇在城西南牛耳山北造石橋欲渡海觀日出入卅里石橋往々猶存、舊說始皇以斷石石自行而生、今西岸石皆東首、隱賑以鞭撻廢言以駢逐、此事虛疑有斯跡也、

〔古今和歌六帖三〕はし

かつらぎやわたすくめぢのつぎ橋は心も去らずいざかへりなむ

〔拾遺和歌集雜十賀〕大納言朝光下らうに侍りける時、女のもとに去のびてまかりて、あかつきにか

へらじといひければ、

春宮女藏人左近

岩橋のよるの契もたえぬべし、明るわびしきかつらぎのかみ

〔奥義抄中ノ上〕いは、しよるのちぎりもたえぬべし、あくるわびしきかつらぎのかみ

むかし大和國に役優婆塞といひけるもの、ゆき、よかりなんといひて、かつらぎ山よしの山のあひだに橋をわたさんと思ひて、日本國の神々に祈こふに、かつらぎにいます一言主と云神、一夜のあひだに、かの山この山のみねにいしのはしをわたしはじめ、ひるはかたちの見にくしきには、かりてわたさぬを、役をそかりてなんどいひて、ひるもわたすべきよしをせむるに、神はらだちて託宣して帝に奏したまはく、役優婆塞と云もの、王位をかたぶけむとす、つみし給ふべしと、みかどこのつげによりて、役行者を伊豆國にながしつかはしつ、神なをかれが世にあらんことををそれて、命をたゝるべきよしをかさねて奏するによりて、人をつかはしてころすべきよしおほせらるゝに、使いたりてつるぎをぬきてころさむとするに、つる